

What's new? —研究室探訪—

信州大学医学部子どものこころの発達医学教室

本田 秀夫

当教室は、長野県および松本市からの委託事業費で運営され、県内で発達障害児者の診療にあたる医師および支援にあたる支援者の育成とネットワーク構築を主たる業務としています。同時に、附属病院子どものこころ診療部および信州診療連携センター発達障がい情報・支援部門と一体的に運営しながら児童青年精神科診療、研修、発達障害に関する情報発信などを行っています。研究では、主として思春期以前に診断されることの多い精神障害やメンタルヘルスの問題に関する調査研究を行っています。児童青年精神医学に関するテーマについて研究を志す精神医学教室の大学院生も研究に参画しています。

1. 発達障害に関する研究

① コホート研究

岡谷市で乳幼児健診を受診した子どもたちの健診情報をデータベース化し、出生前後の母親のメンタルヘルス、発達障害等の診断、思春期のメンタルヘルスの問題の発生等の関連について調査研究を行っています。また、横浜市総合リハビリテーションセンターとの共同研究として、横浜市港北区で就学前に診断され支援が開始された人たちのコホート調査を行っており、現在は成人後の長期追跡調査を行っています。

② 診断と治療に関する研究

自閉スペクトラム症の固執症状と強迫症における強迫行為との症候学的関連や、発達障害特性を有する女性の産前産後メンタルヘルスについて研究を行っています。また、発達障害の子どもたちを対象としたアンガーマネジメント、マインクラフト®を用いた集団作業療法、家族を対象とした心理教育などを行い、その効果について検討を進めています。

③ 行政的研究

厚生労働科学研究およびこども家庭科学研究を受託し、行政的な研究を行っています。

地域の特性に応じた発達障害の支援体制を整備するための前段階として、各地域の支援の現状について点検するためのツールとして、「発達障害の地域支援システムの簡易構造評価 (Quick Structural Assessment of Community Care System for neurodevelopmental disorders: Q-SACCS)」を開発し、全国の自治体で地域支援体制を検討する際に用いられています。また、障害のある子どもがいる保護者に支給される特別児童扶養手当を申請する際に主治医が記入する認定診断書 (精神障害用) の改定版およびこれを用いた判定のガイドライン案を作成しました。

現在、レセプト情報・特定健診等情報データベース (NDB) を用いて発達障害の診療に関する動向を把握するためのシステムについて検討しています。NDBを用いることによって、自閉スペクトラム症および注意欠如多動症の発生率を把握し、継続的にフォローすることを目指しています。また、発達障害の人たちの quality of life (QOL) に配慮した支援のあり方に関する研究を進めています。

2. 児童期・思春期の神経性やせ症の治療に関する研究

児童期・思春期の神経性やせ症の治療では、本人への心理治療とともに家族を対象とした心理教育が有効とされています。当教室では、近年欧米で有効性が示されているマルチファミリーセラピー (multi-family therapy for anorexia nervosa; MFT-AN) を日本の文化に合わせて修正した日本版 MFT-AN を開発し、その効果について研究を行っています。

3. メンタルヘルスに関する研究

信州大学教育学部附属学校園および教育学部と連携して、小中学生のメンタルヘルスに関する調査研究を行っています。現在は、小中学生におけるインターネットゲーム依存と精神的健康度および QOL との関係について調査しています。また、成人の読み書き困難の傾向とメンタルヘルスとの関連について調査しています。

4. 子育て支援アプリケーションの開発

当教室では、養育者、保健師、保育士、教師などが日常的に参照して育児に活用するためのモバイルアプリケーション「のびのびトイロ」を開発し、2021年3月に iOS 版および Android 版を各アプリストアから無料公開しました。2025年5月末の時点でダウンロード数が4万に達しています。現在、のびのびトイロが養育者の育児ストレスや育児態度に及ぼす影響について研究を行っています。